

審査員からの応募呼びかけメッセージ

審査員 青木 淳 (AS)
大月 敏雄 (東京大学 大学院工学系研究科建築学専攻 教授)
貝島 桃代 (アトリエ・ワン／スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築振る舞い学教授)
宮崎 晃吉 (株式会社 HAGISO)

メッセー

青木 淳

AS

建築士がなりわいとして成立するには、そのための土壌がいる。その土壌が痩せ細ってきたのか、それともその成分が変わってきたのか、「これまでの建築士」のままでやっていくのがきつくなってきた、というのは、もう長いところ、感じられてきたこと。もし、ほんとうにそうなら、新たな土壌にあわせて建築士が変わるか、建築士自らが自分が生きていくための土壌をつくっていかねばならないだろう。とはいえ、楽しくないことはしたくない。やりがいがあって、かつなりわいとして成立している、そんな「これからの建築士」のありかたを実践されている人に会えることを楽しみにしています。「作品」として優秀を顕彰するのではなく、あたらしい地平を見せてくれることを顕彰する賞。ふるってご応募ください。

大月 敏雄

東京大学 大学院工学系研究科建築学専攻 教授

「これからの建築士」賞なので、これまでの建築士とは違った何かが表現されていることが期待される賞なのだと理解している。では、「これまでの建築士」とは何か。私の観点からすると、施主も、敷地も、大まかな設計条件も、お金も、ほぼ上流で整理された状態で登場する、建築設計技師のような、川の下流に位置するような職能である。ただこれは、建築士の基本でもあり、ここをゆるがせにしてはならないだろう。その上でなおかつ、川の上流で旗を振っているような活動をしている姿が見えてくることが重要だろう。世の中が少しでも良くなれば、必ずしも建築設計という行為に回収されなくともよい。上流のほうで建築に関わることに取り組んでいたら、いつの間にか、下流の生活風景が変わっていたというような、そんな建築士の姿を期待したい。もちろん、その人が「いま上流にいるぞ」と意識していようがいまいが、その川の支流がか細いものであっても、少数の人々の幸福につながることでできそうなら、りっぱな「これからの建築士」ではないかと思う。

貝島 桃代

アトリエ・ワン／スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築振る舞い学教授

これからの建築士のあり方に光を当てるこの賞の役目は、建築士の職能の広がりを未来に繋げるものと理解しています。2回目となる審査を担当しますが、去年は賞の趣旨とは合わない応募作品が多く、対象を選ぶのに苦労しました。今年はぜひ賞の意図を理解していただき、より多くの応募があることを願っています。またその応募にあたっては、いわゆる建築の図面表現を超え、時間や社会、われわれを取り巻く環境など、広がりを表現することが重要と考えます。賞への応募は、見えないものを見えるようにする良い機会です。みなさんのチャレンジ、お待ちしております。

宮崎 晃吉

株式会社 HAGISO

これからの建築士。を考えるうえで、2つの考えが同時に頭をよぎります。一つは、専門分化から統合に向かう時代に、もはや建築士を起点にする考えに固執する必要はないだろう、という考え。もう一つは、とはいえ建築士を起点にするからこそ見えてくる可能性はまだまだ未開拓である、という考えです。いずれにせよはっきりと感じるのは、いままで考えられてきた仕事は今後あらかたAIに補完され、建設費の高騰で立派な建築を作っていくことに主眼を置くのがナンセンスになっていくなかで、翻って建築にまつわる「喜び」を作り出していくようなフィールド、生き方にこそ希望がある、ということです。止まらない産業の慣性を横目に、わくわくするような実践で地べたを覆っていくことに加担したいと思います。